

環境と建築

第5回

建築物や構築物は、その計画から設計、建設、運用、改修、廃棄に至るまで、自然環境や地域の土地柄、風土を常に意識しつつ、地域住民や利用者に対するサービスを担っています。

本シリーズでは、道内の建築物や構築物が環境をどのように意識し、どのような手法でサービスを行い、どのように利用されているかをキーワードに紹介します。

「静かにそっと包み込む空間」

小川原脩記念美術館／倶知安風土館

建築家 井端 明男

■10月3日 羊蹄山に初冠雪

久しぶりに美術館を訪れたのは、羊蹄山の頂にうっすらと初雪が降った秋晴れの日であった。羊蹄の麓は収穫を終え、のんびりとした空気に満たされていたが、どこことなく冬が近いことを感じた。

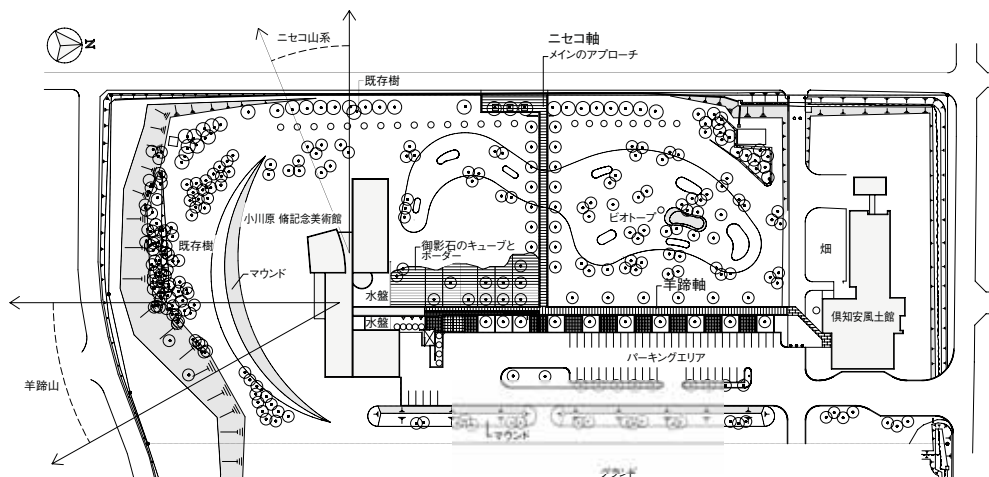
風土館前の畑も刈り取ったソバを円錐状に立掛け自然乾燥をしていた。畑には秋大根が残っている程度で、他のものは一足先に酒の友として片づいていた。大根もソバと一緒に次の出番待ちをしている。一年草のサルビアや、マリーゴールドも終盤に向け、最後の力をふりしぼって咲いている。

計画当時は、敷地内に畑ができることなど考えてもみなかった。しかし、周りの空気と土の力が直接、花や実、そして根に活力を与え、一年でこ



美術館と羊蹄山

れほど成長し目と味覚を楽しませてくれる畑の力は大きい。ソバ、大根、イモ等の花、風に揺れる麦、風景づくりの要素として最近注目している作物類である。





水盤とみかげ石のボーダー



美術館から風土館エントランスへ

■風景の建築

美術館計画は今から8年前、平成9年に指名プロポーザルによって決定された。イメージスケッチ等一切なく、文章だけの提案書とヒアリングで幸運にも選定された。私たちの提案とイメージは、町民に愛され親しまれる「まちのミュージアムづくり」だと考えた。羊蹄山とニセコ連峰に向き合う建築は多くを語らない。「おしゃべりではない建築」として存在することをイメージした。環境から突出することなく、柔らかなスカイラインと静かな表情をもち、その存在を時の流れの中で主張し続けるものとして考えていた。

内部空間はゆったりとくつろげ、繰り返し訪れる魅力をもった空間を生み出すことを考えていた。そして、後志ミュージアムロードの拠点として質の高い豊かな空間は、町民にとって心地よく、親しまれる美術館となることを願っていた。

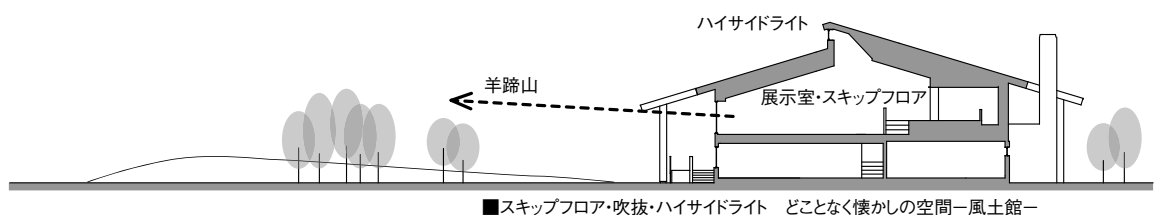
私たちはランドスケープも建築的であるべきと考えていた。建築がランドスケープを構成し、やがて風景となることを目指した。羊蹄山、ニセコ連峰、小川原脩の原風景と向き合う環境の中で、小川原脩のいう「静かにそっと包み込む空間」を作りたいと考えていた。

一方、風土館として使用する日体大旧宿舍は少々荒れてはいるが、周りの環境になじみ、風景化していた。美術館とは、形、色調、全く違うデザインである。この施設が建設された当時、今から30年ぐらい前は、スキップフロアや吹き抜け、トップライト等が流行し、魅力的な空間が数多く世の中に出現した時代でもある。

この建物も当時の流れをしっかりと捉え、空間の広がり、展示空間として申し分のない豊かさである。

この計画では、敷地全体をデザインするというチャンスにも恵まれた。今までは、建築デザインと外構デザインは別々に考えられていた。本当の意味でコラボレーションができれば、内と外との理解度が高まり一体の計画が可能となるのにと、いつも物足りなさを感じていた。

私たちが外を考える時、内部空間との繋がり、開口部を通して見える外の見え方、風景の捉え方等、内から外へ向かってのイメージ作りと、その逆の外から見て内のあるべき姿も強く意識している。いずれも内と外は同じ軸線上にあり、全体が空間として意識できることが理想と考えている。



■スキップフロア・吹抜・ハイサイドライト どことなく懐かしの空間—風土館—



羊蹄軸



ニセコ軸

■小川原脩先生との出会い

設計が正式に決まった後、小川原先生のアトリエにご挨拶に伺った。春も終わりに近い頃だったと思う。古い住宅のアトリエが印象に残っている。天井が高く、壁は黒く塗られ、さほど広くないアトリエであった。描きかけの絵と何枚かのキャンバス、そして何も描かれていないキャンバスが1枚壁に掛けてあり、画家のアトリエとはこのようなものなのかと、今思えば画家のアトリエに入ったのは後にも先にもあの時が初めてであった。ストーブの側に腰掛け、パイプをくゆらせ、高齢で小柄であったが画家としての威厳があった。私たちはあの時50才に近い年齢であったが、画家の前では子供のように緊張しながら行儀良く座りお話を聞いていた。何を話したかは覚えていないが、美術館の具体的な話なんかもろんできなかったように思う。

当時健在であった先生は、今を生きる画家として、強い言葉ではないが感動的で心に残る言葉を画集の中に残している。私の歩いてきた道という対談の最後に「まだいろいろ伺いたいことがありますが、そろそろこの辺でやめましょう」、最後に「最近のご心境は」という問いに、先生は「一言に尽きますね。いい絵を描きたい」と言い、時々一人の時は「いい絵を描きたいなあ」と独り言を言っているんです。「ああまた言ったわと…」この印象的な一節は今も私の心に残っている。

■羊蹄軸とニセコ軸

この敷地には昭和52年に建設された日体大の旧宿舎があり、グラウンドも併設されていた。当時はまちの歴史資料の収蔵場所として使用されてい

た。荒れたグラウンドの正面にはくっきりと羊蹄山、右方向にはニセコ山系の山々と雄大な光景に圧倒されたのが最初の印象である。

この計画では、デザインの違う美術館と風土館を150mの距離を置き、対座させている。この即かず離れずの距離が、新旧のデザインから生ずる違和感を消してくれると思いき、当初からあまり気にとめず、風土館は30年前と変ることなく在るがままの姿で羊蹄と向き合っている。

敷地は南北に290m、東西に120m、この外構計画を決定付けるのは、南北の羊蹄軸と東西のニセコ軸である。羊蹄軸は美術館と風土館のエンタランスとを結び、羊蹄山へ向かっている。この軸を境にパーキングエリアと緑地、更にニセコ軸を境に美術館エリアと風土館とのつながりが強いエリア、それぞれに個性を持たせている。この軸線は石張りのペーブメント（舗装した道路）と照明、冬は除雪した雪が背丈以上に積み上げられ、夜は豪雪地ならではの雪あかりのアプローチとなる。地方都市に建つ展示施設としてはパーキングエリアが広すぎると思われるが、堆雪スペースのことを考えると俱知安では必要な広さである。ニセコ軸の南側、美術館の水盤を含む外部空間は、建築の延長として空間化することを意図した。水盤、御影石のボーダーとキューブにより静けさを表現し、玉石と芝の混成による仕上げはゆるやかにクローバーの緑地へとフェードアウトし、他のオープンスペースと融合するようにした。

ニセコ軸の北側は人工物を持ち込まない自然の高まりを意図した。このエリアは今ではあまり珍しくないが、ビオトープを作っている敷地全体の排水と屋上排水等を集合させ、また敷地の西側に



ビオトープ越しに風土館

小さな流れがありそこから引き込んでいる。当初は、雨が降って水が溜まればいいし、日照りが続けば枯れてもいいと、あまり気にしない湿地をイメージしスタートした。今ではヤナギが数本自然に生え、日陰をつくり、さまざまな生き物がどこからともなく集まっている。カエル、ゲンゴロウ、ムカシトンボ、鳥や小動物、水生植物まで、「環境がいいとわかれば自然に集まるものだね」と、館の人たちは話している。ホタルも近々飛ぶ予定と、小さなビオトープであるが凝縮された自然が感じられる。

■余談…

昨年の8月にアルバ・アアルトの建築を見るためフィンランドへ行った。ヘルシンキから北へ足を伸ばしロバニエミ、ユバスキュラと、見れるだけ見ようという年をして懸命に歩いた。以前見たものを再度訪れたり、初めて出会うもの、それぞれに感動したり認識を新たにしたり、楽しい時間を過ごした。今、建築とランドスケープという視

点で振り返ると、特別なデザインをしていないのがデザインなのかと思うほど自然である。建築以外の人工物は見当たらない。建築に内包された中庭は別にして、さらりと作られている。ロバニエミの一連の建築群、ユバスキュラ大学のキャンパスとその周辺のアアルト美術館まで含めた建築群、いずれも完成度の高い建築の配置そのものがすでにランドスケープデザインとして何者も相容れない構成となっている。

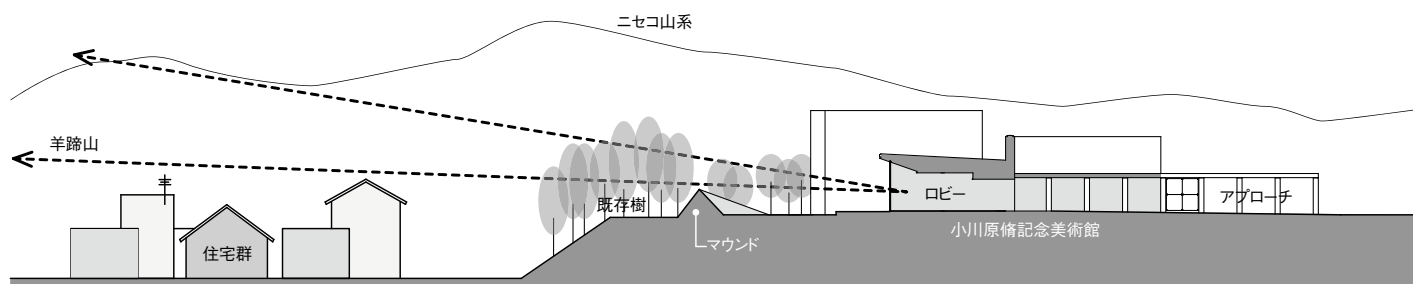
土地の形質、高低差、風の方向、まちの方向、高緯度の国、室内への太陽光の入射角度等によってあらゆるものが必然的に決まってしまうと思う。建築とランドスケープ、どちらが先でも後でもなく、アアルトを見ればそれがイコールだと思うことに何の疑問も持たない。

■段丘からの風景

風土館のエントランスに立つと、羊蹄山と美術館は一枚の絵として納まりがいい。しかし、段丘の南側に立つと、羊蹄より先にさまざまな色と形を持った住宅が目に入ってしまう。せっかくの羊蹄がもったいないと思い、視線を切るためのマウンドを設けた。周りの屋根並が見えるか見えないかのギリギリの所で、南からの引きとマウンドの高さを決めた。

なじみ深い切妻の屋根並みや板張りの外壁が見えるのであれば、すそ野の風景として効果的であるが、最近の家は残念ながらその様には見えない。目の前の家並みを消すことに無理はあるが、極力純度の高い羊蹄を見せるべくマウンドを築いた。

美術館のロビーからは、マウンドと既存樹が功を奏し羊蹄を美しく望むことができる。来館者が驚きの声を上げるのはロビーに一步入った時である。羊蹄の姿に圧倒され、思わず声を発してしま





マウンドと照明



切り取られた風景

う。駐車場に車を止めた時、すでに羊蹄を見ているし、北海道人にはそんなに珍しい風景でもないと思いつつも、ロビーという限定された空間からの眺めは特別のようである。

■ 秋から冬、白の季節へ

開館して7年目の秋。全体に充実した空間の広がりを感じられる。風土館と美術館、全くデザインの違う建築は違和感なく存在し、二つの建築をつなぐ緑も豊かさを増している。しかし、人間の思うように育てようとする自然と、そうはなるまいとする自然との戦いが、植えたつもりのないものまで成長させ、またグランドカバーとしてのクローバーはいつの間にか姿を消したり、徐々にではあるが目に見えない生きものたちが、周りの環境を変え始めている様子が見える。

一方、建築の延長としてデザインしたエリアも、少しずつではあるが整形した形が崩れ始めている。玉石が草で覆われ、御影石のキューブやボーダーも、当初意図した形を維持することが難しくなっている。

もともと都市で行うデザインの手法を、自然度の高いこの土地に持ち込むことに多少無理があったのかもしれない。

環境を整えるデザインとは、一時的な満足感だけではなく持続可能なデザインとすべきであると思う。しかし、自然へと回帰しやすいことも、またその過程において美しく変化すべき手法も学ぶことを知らされた。

初雪の後、根雪になる前の一時期、冬のランド

スケープとして美しい光景が見られる。1月になると豪雪のまちは最盛期。今年は特に多いようです。皆一生懸命除雪をしています。巨大なお餅のようなすごい雪庇^{せつび}も見られます。運が良ければというか、悪ければ小川原脩の言う白の世界に出会えるかもしれません。「白い季節には白の恐ろしさがある。この白の中をただ一人っきりでさまよった事のある人ならば、白という色の持つ恐ろしさを知っているだろう…」(小川原脩白冬の中の思考から)

豪雪の地の美術館へ足を運んで下さい。

白という怖さと美しさを合わせ持った色、都会の白とは違う白の世界を感じて下さい。

そして、「静かにそっと包み込む空間」に浸り、中国、チベット、そして天空の里ラダックへと旅した画家の世界へトリップしてみたいかがでしょうか。

帰りがけ、もし晴れていたら、この先もずっと美しく在り続ける羊蹄にひと声かけてみて下さい。

profile

井端 明男 いばた あきお

1949年北海道生まれ。'70年北海道産業短期大学卒業後、ランド計画研究所、日本技建を経て、'91年アトリエakuに参加・取締役。第21回北海道建築賞(ふれあいの森・積丹)、小樽市都市景観賞(北海道立海洋科学センター)、JIA北海道支部住宅委会住宅賞(ニセコ本通りA団地)受賞。江別市都市景観委員、(社)日本建築家協会会員、(社)日本建築学会会員。
